

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可
平成20年5月1日発行 毎月一回 1頁発行
俳句雑誌 沖 第39巻第5号



俳句雑誌[おき]

5
月号

沖
発行所

吾子嫁ぐ

能村 研三

春欄漫

紗恵結婚

芽吹きそむ朴の樹下より吾子嫁ぎ

初花を賜る朝や吾子嫁ぐ

聖堂を嫁す子と歩む春日差し

祝福のトランプト鳴りうらけし

紗の雲ありてこそ天たかし
産声や月明いよ光増し
病む父は命名とぞく帰燕の日
登四郎 研三

三女の紗恵がこの三月に結婚した。掲出の句は紗恵が誕生の時の句であるが、ちょうどこの頃は私の母が病気がおもくなり、父も胃潰瘍で何度も入院を繰り返していた時期で、この娘の誕生は我が家がやや暗くなっていた時を明るくしてくれた。そして紗恵の名前をつけてくれたのは父であった。

紗恵は学校を卒業し社会人になった時、俳句を作りたいと言い出し「沖」にも数回投句をしていたが、仕事が忙しくなったため中断せざるを得なくなった。

結婚した相手は中々誠実な好青年で、男の子がいない我が家にとっては新鮮なものを感じる存在になった。

挙式は東京のホテルで行ったが、娘の希望でパージンロードのある教会形式で行われた。聖堂に入場しウエディングドレス姿の娘と腕を組んで赤い絨毯の上を歩くのは何か照れくさいものがあつたがやはり感動的な

小石川吟行

鳥の巢は梢八合の位置にあり

鳶坂は富坂となる花は葉に

雨後ことに八重を籠らす利久梅

小添木に凭れし藤の蕾かな

洗礼名墓誌の真中に花の雨

卯の花は三河の寄進於大墓

一瞬であった。

新郎方の主賓で招かれた方は、父が市川学園の最初の教え子で私も以前から知っている人であつたことなど、その出合いの縁の深さというものを感じた。

我が家にはまだ娘が二人居るが娘を一人新生活に送り出したことは何か淋しいものがある。

娘の結婚が一段落した四月に入つて、仕事の辞令が発令され十年間務めた文化の仕事から、市の総合施策を推進する企画部に異動となつた。秋には市川で健康都市の世界大会が開催され、それを担うことが当面の大きな仕事となるようだ。

能村 研三



梅見酒

林 翔

耕二追憶

市川市在住の沖会員鳥居秀雄氏が
鹿児島市の「かごしま近代文学館」
で開かれていた「福永耕二展」を覧
て来たとして、目録その他を手土産と
共に届けて下さった。夫人が代理で
来られたので、詳しい事は聞けな
かったが、恐らく鳥居氏は市川学園
で福永氏が担任した生徒であったの
だろう。同窓会員名簿で調べると、
第十九回卒業生（昭和42年高卒）の
中に氏の名があり、その年度の担任
教師名の中に福永氏の名があった。
福永氏は高校生時代（ワ・サル高
校）から秋櫻子俳句にあこがれて「馬
酔木」に投句し、鹿児島大学在学中
に「馬酔木集」の巻頭を得たという
天才的俳人。登四郎氏は九州旅行の
途次、耕二氏に会い、氏の上京の意
志を確かめた上で、市川学園の古賀
校長に推薦し、翌昭和40年4月から
市川学園の国語科に能村・林・福永
の三俳人が揃うことになった。 昭

き
み
紅
梅
わ
れ
白
梅
か
梅
見
酒

散
り
残
る
紅
梅
よ
其^そ
は
心
の
花

梅
真
白
空
は
真
青
今
日
の
幸

ジ
ヤ
ズ
湧
い
て
花
の
宴
に
も
新
世
紀

婚の日待つ君に落花の繽紛と

過ぎし日の涙思はじ鳥雲に

踏み迷ふ葉がち桜の下道を

「極楽極楽」躑躅籠りに鳴く蛙

青き踏み来て君の靴なぜ赤い

山藤の深空に揺れて春去りゆく

和45年10月「沖」創刊。編集は私が担当することになったが、私には編集の経験が無い。鹿児島で地方誌の編集をしていたという福永氏に教わりながら創刊号の編集をした。

あの日、昭和55年12月4日、入院している福永氏を見舞いに行った私は、はからずも氏の死顔と対面することになってしまった。

病院では泣けなかった。帰りの電車の中でも泣けなかった。しかし、市川大野駅で降り、わが家へ向う途中のやや広い空き地を横切る時、堰を切ったように涙が溢れ、声をあげて泣く私であった。



林
翔

蒼茫集



途中よ

楠原幹子

待つ日

測上千津

初蝶にあへさう白紙ふたつ折り
石塊を神とまつりて梅二月
啓蟄祝絹の波の骨董品屋のぞきをり
佐保姫のさきふれとして絹の波
生きて在るかぎり途中よ青き踏む
恋知らぬ猫なり毛並み美しき

ベレー帽

森岡正作

ロスタイム

北川英子

二手より野火の相搏つ国境
ベレー帽たちまち噂の新教師
歩き初む嬰初蝶に操らる
鳥の糞一つ賜る木の芽山
啄木の二倍も生きて春愁ふ
末黒野を行くや焦土を知らずして

遺すもの無き真白さよ夜の梅
挿木して待つ日待たぬに積もる日々
春や欲しピアノ線ほど張る詩心
春疾風まむかへば湧く底力
まだ使ふ遺品のルーペ拭く朧

牛車ぎっしゃをいま降りしばかりの立雛
病室にあふれて安房のあらせいとう
逃げ切つてみる春麗のロスタイム
わが声遠し春風邪の朦朧体
退院やまづ老梅の白称へ
食べられるため殖えプランクトンおぼろ

通過点

河口 仁志

雛納めしても残像ひひなの間
人に指さされて潜る春の鳩
白鳥^{スワン}去り鴨去り湖の真つ平ら
謳歌せりいま筑波嶺の春闌けて
熱気球上る真下の青き踏む
鳥帰るわが七十路も通過点

春の夢

大畑 善昭

春一番池の面を傾けるほど
チエーンソー二つ響いて春の山
味噌樽の味噌を小出しにして弥生
霊夢ともならずに覚めて春の夢
死ぬことの目出たさ吾は梅の頃
一役に定年が来て八重紅梅

梁百年

千田 敬

百年の梁を賑はせ吊し雛
啓蟄や切字にちから賜りて

葛城の風にさゆらぎ涅槃図絵
露味噌や寡黙の父の味のして
なかんづく春の泪よ加齢とは
草摘むやあの日あのめしあの疎開

宙を飛ぶ

千田 百里

春一番二番三番四囲の塵
八幡村字鳩亭の水温む
風光る鳩亭巢立つ紗恵ちゃんに
竜天に昇る夜の窯火攻めなり
宙を飛ぶピザ生地エープリルフル
優柔の髪切つて春闌くるなり

紅梅

菅谷 たけし

霜柱ざらりと髭が手にあたる
放電も充電もあり日向ぼこ
紅梅といふ一言のよくひびき
紅梅や灰と明るき雲の奥
花粉症マスク艶聞つながらず
葦焼くは銃撃戦の如きかな

潮鳴集



魚眼レンズ

服部 早苗

北窓ひらく魚眼レンズの眼もて
異邦人めく黄塵の真只中
鳥帰る双眼鏡の輪をぬけて
稚の見る水はじめての春の水
水に石おとすもあそび風光る

船の名

林 昭太郎

ガラスにも影といふもの梅三分
船の名に一世二世つばめ来る
船首にて割れるシャンパン風光る
春めけるもの一つに哺乳瓶
花曇ティッシュペーパー層なして

地下水

甲州 千草

梅白し石屋に人の居たことなし
啓蟄の考へてをり食べてをり
噛み合はぬ話ポケットより黄砂
物洗ふだけの地下水草萌ゆる
笹子鳴く光悦垣の一茶庵

豆の花

長谷川 千枝子

対岸の富士洗ひたて風二月
水温むささくれいつか忘れゐて
春浅き祠に干反る油揚
海捨てし郷里のなりはひ豆の花
風音に覚めて飲む水二月尽

沖作品



能村研三選

梅暦地図には載らぬ神社あり

蛤を掘る足裏に太平洋

校門の鎖の錠や鳥帰る

日の神の世に誘はれし葦の角

春の空剥ぎ取るやうに象の鼻

土塊の湯気より春の立ちにけり

小学校見ゆる菩提寺梅かをる

城山へ春の帽子を横かぶり

ほこほこと畑土ほぐる木の芽風

ワルツの蝶マーチの水や畦をゆく

美作^{みまさか}に三鬼と次男^{つぐお}ふきのたう

摘草や諦めきれぬ夢を持ち

ビバルディかつて教師や青き踏む

切り刻む個人情報風邪心地

春星や生まれ変はれるなら男

東京

齊藤 實

市川市

宮島 宏子

長崎

小林 奈穂

千葉

峰 幸子

東京

七種 年男

岩手

栗城 静子

薄氷に触れゆく水の音なかり

街灯の直列長き余寒かな

天地の恵み願ひつ耕せり

ペン音の冴返りたる夜更けかな

花衣人に酔ひつつ人を恋ひ

卓袱台に小さき貝塚あさり汁

アドリブのごとく銀座に春の雪

水仙や灯台の影海に落つ

春光のスパークめきぬ羽田沖

あわ雪や汐にとけ込む舟灯り

先づ一枝活けてととのふ桃の花

折りあげて男雛に女雛添はすかな

船商人さかえし名残り雛の町

お触れには触れぬ高さの享保雛

春雷の一夜の雨を呼びこみし

沖作品 15句選評

*

能村研三

春の空剥ぎ取るやうに象の鼻 齊藤 實

象にとつて鼻は、人間の大切な手と同じように、鼻を使ってえさを取り口に運ぶ。もし鼻がなければおそらく生きていくことはできないかも知れない。ごわごわとして固そうな鼻はかすかな湿り気と弾力があり温もりがある。象は決して敏速な動きを見せるわけでもなく、邪魔そうで、無用の長物とでも言えそうなあの鼻が、細やかで繊細な動きを見せてくれる。この句は象をしみじみと眺めていて春の空を剥ぎとるような一瞬のすばやい動きを捉えたのだ。

ワルツの蝶マーチの水や畦を行く 宮島 宏子

メルヘンの世界に誘いこんでくれるようなあたたかみのある句である。春の到来を待ちこがれた人々にとつてのどかな田園風景は心も何か踊るような弾む気持にさせてくれる。この句は

「ワルツ」「マーチ」という二つのカタカナ語をうまくリフレインの形に乗せたことで弾むような楽しい雰囲気を漂わせている。

美作に三鬼と次男ふきのたう

小林 奈穂

小林さんは岡山出身と聞いていたが、美作は岡山県の津山市にあり、俳人の西東三鬼と安東次男の出身地でもある。西東三鬼は三十五歳で代表作の「水枕ガバリと寒い海がある」を発表し新興俳句の有力な作家として認められた。そして安東次男は詩人、評論家としても活躍した。「落の臺」を介しながら故郷美作に思いを寄せた句になった。

街灯の直列長き余寒かな 峰 幸子

無機質で幾何学的な都会の風景にもある時は詩情を感じることがある。整然と直列に並んだ街灯が灯り、この無限の反復は街路の並木や、回廊の柱列などと共に規則的な美しさを醸し出す。春の声を聞きながらも寒さがぐり返した時の都会のシュールな風景の一コマである。

アドリブのごとく銀座に春の雪 七種 年男

アドリブとは予定していないせりふを即興的に話すことだが、今年の冬は東京でも正に天気予報を裏切るような雪の降り方があった。銀座を歩いていて突然雪に出合った戸惑いもあったのだろう。比喩の句はその喩えが常識的であると陳腐になりがちだが、この句は見事にその域を脱することが出来た。（以下略）